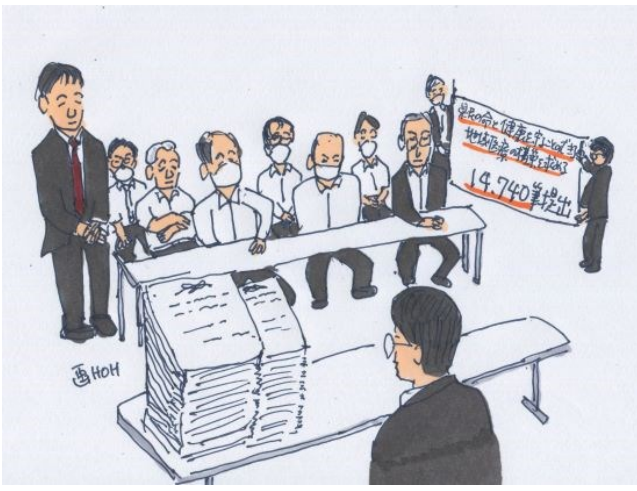
直江津地域に総合病院残してください！

14740人分の署名を知事に提出



「直江津地域に多くの診療科を備えた総合病院を残してください」「病院の再編統合を進めるのではなく、住民が身近にかかれる病院を各地に残すように地域医療構想を見直してください」「医師･看護師を増やすための抜本的な対策を講じてください」。この３本柱での署名は１万4740人分にもなりました。

運動を進めてきた上越地域の医療を守る会（代表石田秀男さん）は9日、会の幹部とともに新潟県庁を訪れ、この署名を花角新潟県知事に提出しました。提出にあたっては、要請文を添えました。以下はその要請文です。

昨年６月、「私たちの街から病院がなくなる」という衝撃が、上越地域全体を駆け巡りました。上越地域医療構想調整会議で、新潟労災病院の閉院計画が発表されたためです。新潟労災病院は、もともとは「勤労者の健康障害の予防、診断、治療、早期職場復帰の為に、専門的医療を実施する病院」として生まれたものでしたが、現在では直江津地域の住民である私たちが頼りにしている唯一で身近な総合病院となりました。この間、いくつもの診療科が閉鎖され、病床数も少なくなってきてはいるものの、新潟労災病院は今もなお地域住民の命と健康のよりどころです。

この労災病院がなくなることで、地域の住民は「医者にかかれない」「通えない」など、不安に駆られています。不安に駆られているのは、この病院の近くに住んでいる住民だけではありません。ＪＲの駅から歩いて行ける上越地域唯一の病院として、ＪＲ信越線やほくほく線、トキ鉄の沿線住民からも頼りにされているだけに、そうした住民も大きな不安に駆られています。

私たちの願いは、「必要なときはいつでもどこからでも容易に病院に行けて、十分な検査や治療を受けられるよう医療体制が整備されること」です。このことは決して贅沢な願いではなく、命と健康を守るためのほんのささやかな願いではないでしょうか。（中略）

貴県が主導する地域医療構想では、この医師不足の現状を打開する方策を何ら示さず「『地域で高度な医療を支える柱となる病院』に医療資源（医師）を集約化」するなどとしています。地域の中核になる病院を充実･強化することは大切なことですが、その病院にのみ医師を集中させることは、中核病院から遠距離の地域に住む住民の命と健康をないがしろにすることでもあり、とうてい納得できることではありません。

対応した県の担当課長は、住民の願いを無視する姿勢でした。許せません。運動を続けます。

この5月に吉川区内で生まれたコウノトリの１羽がまだ近くにいました。この鳥は一番最後に巣立ったオスです。4日、吉川区小苗代地内にて撮影。

【シロヨメナ】キク科の多年草。漢字で「白嫁菜」と書きます。草丈は30㌢～150㌢。車から見たときはシラヤマギクかと思いました。でも、花の付き方が違い、ノコンギクに似た花でした。花期は9月から10月。花言葉は「隠れた美しさ」「無邪気」「信頼」。写真は9月9日、郷津海岸付近の山にて撮影。

８日、「混声合唱団さくら草20周年記念コンサート」に行ってきました。

元高田農業高校教員の高野喜久雄さん（故人）作詞作曲の「水の命」、杉みき子さん作詞の「妙高山に」など、この上越で生まれた曲のいくつかを聴くことができました。素敵な合唱でした。

はしづめ法一の活動レポート

No.2171 2024.9.15

発行･編集 日本共産党上越市議　橋爪のりかず
Tel 025-548-3628
通じないときは 090-5392-1961
E-mail hasiznyg_0808@yahoo.co.jp
URL https://www.hose1.jp/

ブログ「ホーセの見てある記」は←こちら

橋爪法一　検索

春よ来い

第八一八回　夏の終わりに

暑い日が続きますね。でも先日、夏の終わりの匂いというものがあるとしたらこんな感じだろう、と思うことがありました。

久しぶりに近くの代石池（たいしいけ）まで行き、車を降りた途端、ちょっぴり焼けたような匂いがしました。匂いの出どころは、猛暑で枯れ始めたススキです。朝露に濡れていました。

今年の夏は三〇度を超える日が続き、日当たりのいい場所の草花は徹底的に痛めつけられました。ここのススキが枯れてきているのもそのせいですし、その近くにあるナツハゼ（別名アタヅキとも）の木の葉も枯れ、落ちていました。ナツハゼは普通ならもうひと月も先になってから実が熟し、食べごろになるのですが、すでに黒くなっているものがいくつもありました。その黒い実を口の中に入れてみると、ゴムのように弾力があり、味はいま一つでした。

池には周回道路があり、少し歩き始めたところに、ナラの木が道路をふさぐように倒れていました。木の幹の太さは一〇㌢くらいで、高さは五㍍近くあったと思われます。風で倒れたのか、それとも根元を虫に食われてしまったか、どちらかでしょう。どちらにせよ、何となく、ひょろひょろと伸びたような雰囲気のある木でした。

その根元の部分に小さな白いものが見えました。それも見たことのない形になっていましたが、間違いなく花です。花は草アジサイのようにも見えましたが、明らかに低木の花で、一部は薄いピンク色になっていました。スマホを持って近づき、何枚か写真を撮りました。その上でインターネットで何の花か調べたところ、ツツジ科のホツツジであることが分かりました。花は明らかに終わりに近く、形は少し崩れていました。わかりにくいわけです。

ホツツジは尾神岳の展望台のすぐ東側にある雑木のなかで一斉に花を咲かせているところをみたことがあります。小さくて可愛らしい花でした。それと同じ花が平場の池の周りにあるとは……。

それから、五歩ほど歩いた所で、このホツツジがまとまって花を咲かせている場所を見つけました。ナラの木が倒れた場所とは違い日当たりが悪く開花が遅かったのでしょう、花の形はまだしゃんとしていて、崩れた感じにはなっていませんでした。

そこから離れ、数㍍歩くと、ナツハゼが小さな緑色の実を生（な）らしていました。葉もしっかりついていました。こちらも日当たりが悪い所です。葉は青々としていて、まったく落ちていませんでした。

さらに進むと、ヤマウルシの木が何本かあり、その中の一枚の葉が赤くなり始めていました。ヤマウルシの葉は赤飯に使う朴の木の葉の半分ほどの大きさです。何枚もの緑色の葉のなかで、この一枚だけが特別目立っていました。

この紅葉を撮るためにカメラを向けたら、その奥に白い野の花がありました。キク科のシラヤマギクです。真っ白な菊の花をまばらに咲かせていました。よく見ると、シラヤマギクはここだけではありませんでした。この先にも数本、花を咲かせている場所が見えたのです。

この日、周回道路を歩いて出合った野の花は、ホツツジ、シラヤマギク、オトコエシ、オヤマボクチ、ハギなどです。すでに終わりに近づいているもの、盛りとなっているもの、これから咲かせる準備に入っているものなど様々でした。

野の花やセミの鳴き声などが季節の変化を伝えてくれることは、長年の経験の中で頭の中にしっかり入っています。でも野にあるものの匂いで夏の終わりを意識したのは今回が初めてです。車に再び乗り込もうとした時、また枯れたススキの匂いが漂っていました。

スイッチバックの二本木駅も紹介

鉄道写真家・中井精也さんの「トキめき鉄道の旅」で二本木駅などが紹介されていました。

妙高山を望む風景、スイッチバックのことはもちろんのこと、駅舎内での喫茶店を核にした地域づくりも話題となっていました。

素敵な番組でした。

「みんなの花展」で野の花を学ぶ

いけばな小原流の「みんなの花展」をのぞいてきました。何人かの知人が出展していました。私が関心持っていたのは、この時期、どんな植物、野の花を入れるかです。夏はぜやヤツデをうまく使った作品がありました。ホトトギスやリンドウがもう咲いているとは驚きました。会場では、一人の女性から、「コウノトリはいまどこにいますか」と訊かれました。見たことのある顔の人でしたが、いまもって思い出せません。吉川区在住の人かも。

ニュースフラッシュ

上越地域各消防署における空間放射線量率測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。１時間当たりの測定量です。

消防署によると、通常は１時間当たり0.016～0.16μSv（マイクロシーベルト）だとのことです。

	9月4日（水）	9月11日（水）
上越消防署	０．０５３	０．０５０
上越南消防署	０．０４３	０．０４７
新井消防署	０．０５０	０．０５０
頸北消防署	０．０３７	０．０５０
頸南消防署	０．０６０	０．０６０
東頸消防署	０．０４０	０．０５０
名立分遣所	０．０６０	０．０６０
高士分遣所	０．０５３	０．０５０